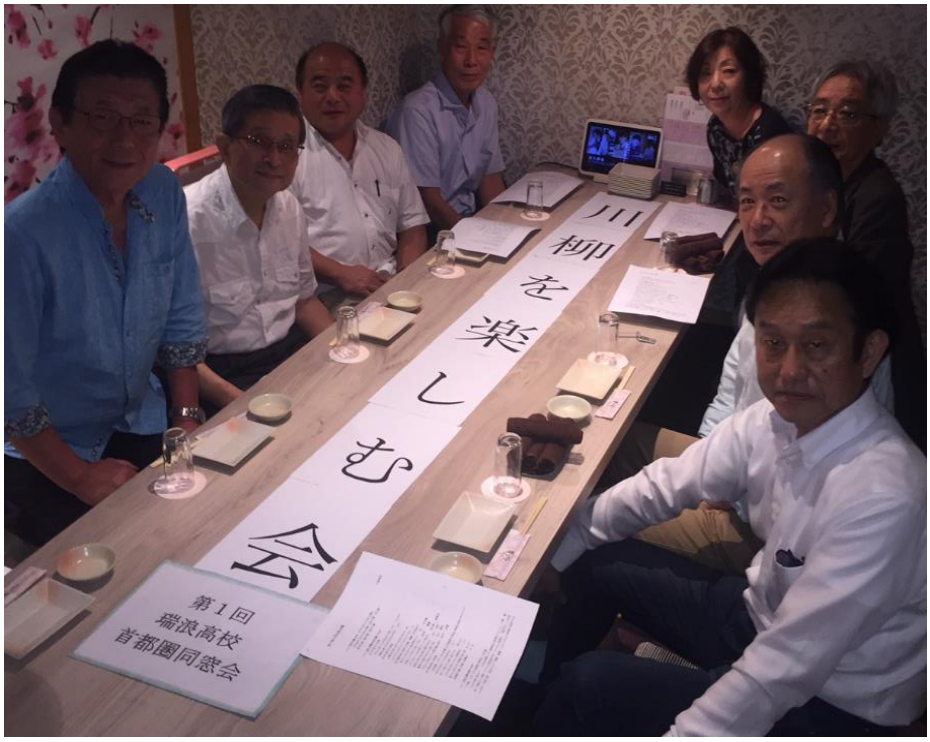
江戸川柳を聞き、創作意欲を高めた第１回会合

瑞浪高校首都圏同窓会「川柳を楽しむ会」

日時　令和元年 9 月 14 日（土）午後3時～6時　　会場「ウメ子の家」新宿東口店



瑞浪高校首都圏同窓会のサークル活動の一環として発足した［川柳を楽しむ会」の第１回会合が、令和元年９月１４日土曜日、新宿の居酒屋個室で開催されました。

初回ということで参加者は８名でしたが、前首都圏同窓会会長で江戸川柳研究家の小栗清吾さんから、江戸川柳をテーマに講演いただいたお陰で、皆さんの創作意欲が高まり、次回までに「ふるさと」を題材にした作品一人３点を持ち寄ることになりました。

小栗さんの講演は江戸時代の言葉や風俗の紹介に始まり、川柳のルーツ、歴史上の偉人を題材にした詠史句、題材として最も多く取り上げられた吉原句、当時の男女の仲を詠った破礼句など興味深い内容ばかりで、ユーモアを交え、テンポの良い語り口が皆の笑いを誘い、時間の経つのを忘れて聞き惚れました。

次回は、来年２月１日土曜日に開催予定です。

小栗さんの講演を聞くだけでも価値がありますので、皆さん気楽に参加してください。

また、どなたでも自由な題目で川柳をお寄せいただければ、来年の首都圏同窓会総会での優秀作品表彰の対象に致しますので、揮ってご応募ください。

応募先　宮田栄子幹事長　E メール eiko-miyata@jcom.zaq.ne.jp

イナゴ（五・七・五）君のメモ

川柳の名称の由来

川柳のルーツは和歌（五・七・五・七・七）と言われている。

鎌倉時代には、それまで一人で読んでいた和歌を上の句（五・七・五）と下の句（七・七）に分けて、別々の人が読む連歌が起った。

そして江戸時代には、下の句にあらかじめお題を決め、上の句の出来栄えを競う「付け句」という文芸が流行した。

付け句は競争性・遊戯性に富んだ懸賞興行となり、応募者は投稿料 16 文（現在 500 円程度）を添えて興行主に投稿し、入選者には賞金が与えられた。

その審査委員長格が「柄井川柳（からいせんりゅう）」。

やがて付け句が下の句を除いても意味が通じるものを、柄井川柳の名前を取って川柳と呼ぶようになり、現在に至っている。

付け句の応募にはお金が懸かっていたので、当選者は「川柳っていい男だ」と褒め称えたが、落選者は「こんちくしょう川柳の奴」と罵り合ったに違いない。

どちらに転んでも、当時の柄井川柳さんは、話題の人であったことは確かだ。

吉原句

江戸時代の吉原といえば、当時の男たちにとっては幕府公認のパラダイス。

しかし、吉原のトップスターである花魁（おいらん）とお付き合いするには、紹介茶屋に大金を払い、さらにその都度ご祝儀が必要な「初会」「裏」「馴染み」といった三つの儀式を経なければならないしきたりがあった。

初会とは、広い客間に花魁が遠くの上座に座り、下座に座って顔を見るだけ。

花魁は目も合わさなければ、口もきいてくれない。

二回目の裏は、初会と同じことの繰り返し。

三回目の馴染みで初めて近くに寄って話が出来る。この段階で花魁に気に入ってもらえなければ、努力は全て水の泡。

小栗先生紹介の吉原句。

国分より　手ざわりのいい　三会目

最初、この川柳は「国分という女性よりも、三度通った女性の手ざわりのほうが良かった」と詠んだ句かと思ったが、小栗先生の解説を聞いて驚いた。

ここでいう国分とは、おはら節のたばこ。三会目とは花魁との馴染みの席。

手ざわりとは、たばこ盆の中に入った祝儀の小判の感触。

花魁は、大金をつぎ込んでくれた男性より、小判がお好きだったようで。

男って、なんてスケベな生き物なのかと、つくづく身につまされた一句だ。